論　文　内　容　要　旨

Utility of the inside stent as a preoperative biliary drainage method for patients with malignant perihilar biliary stricture

（悪性肝門部領域胆管狭窄に対する術前胆道ドレナージにおけるインサイドステントの有用性）

Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Sciences, 2021, in press.

主指導教員：大段　秀樹教授
（医系科学研究科　消化器・移植外科学）
副指導教員：田中 信治教授
（広島大学病院　内視鏡医学）
副指導教員：伊藤　公訓教授
（広島大学病院　総合診療医学）

中村　真也

（医歯薬保健学研究科　医歯薬学専攻）

【背景・目的】

適切な術前胆道ドレナージ（PBD）は悪性肝門部領域胆管狭窄にとって非常に重要である．PBD には, Vater 乳頭をまたいで留置する従来の plastic stent(conventional stent)留置に比べて胆管炎の少ない内視鏡的経鼻胆道ドレナージ（ENBD）が推奨されている．しかし ENBD は患者の不快感も大きく，手術まで長期間を要する症例においては不適切なこともある．悪性肝門部領域胆管狭窄に対する PBD 方法として, Stent を胆管内に収納する inside stent の有用性に関する報告はない．この研究の目的は，悪性肝門部領域胆管狭窄の PBD における inside stent の有用性を明らかにすることである．

【方法】

初回 ERCP 時に ENBD が施行された悪性肝門部領域胆管狭窄患者 81 例を対象とし後方視的に解析を行った．手術までの待機期間中，81 例中 61 例の患者に胆道 stent 留置術が実施され（inside stent 41 例, conventional stent 20 例), 残り 20 例の患者は 手術まで ENBD を継続された．手術までの治療成績および術後合併症を 3 群間で比較検討した．

【結果】

手術待機期間中の緊急 ERCP(re-intervention)施行率は，inside stent 群が conventional stent 群および ENBD 群に比べて有意に低く（9.8% vs. 40%, 35%, P = 0.01, 0.030），re-intervention までの期間も有意に長かった（log-rank: P = 0.004 , 0.041). inside stent 群で術前化学療法を受けた 5 例のうち，re-intervention が必要となったのは 1 人だけで，Re-intervention までの期間は 65 日であった．術後合併症の発生率は 3 群間で有意差はなかった．

【結語】

Inside stent は conventional stent で問題となる十二指腸液の逆流や食物残渣の影響が少なく，また ENBD で問題となる catheter 逸脱の危険性が少ないと考えられた．Re-intervention までの期間も長く，術前化学療法症例など手術までの待機期間が長い症例に適している可能性が示唆された. Inside stent は悪性肝門部領域胆管狭窄の患者にとって有用な PBD 法となりうる．